

王勃「滕王閣序」中の「勃三尺微命、一介書生」 句の解釈について

道 坂 昭 廣

「秋日登洪府滕王閣餞別序」（以下「滕王閣序」と略す）は、多くの典拠をちりばめ、様々な字数の対句を連用しつつ平仄配置もほぼ整齊と、王勃の代表作であるばかりでなく、中国文学史上、優れた駢文作品の一つと評される。

ところで、奈良の正倉院に「王勃詩序」と称される卷子本（以下正倉院本と称する）が伝存していることは、周知のことであるが、末尾に「慶雲四年」（707年）という紀年があり、王勃没後30年ほど後に書写された、現存する最古の『王勃集』の一部と見なされる。古いばかりではなく、かなり正確に書写されていると見なすことが出来、テキストとしても信頼性が高い⁽¹⁾。その抄写された41篇の序作品の中に、「滕王閣序」も含まれている（図1）。『文苑英華』所載の「滕王閣序」とは、数え方にもよるが59箇所の異同がある。その内の幾つかは、新たな解釈の可能性を示す文字や、従来の解釈に改変を迫る句が含まれている。

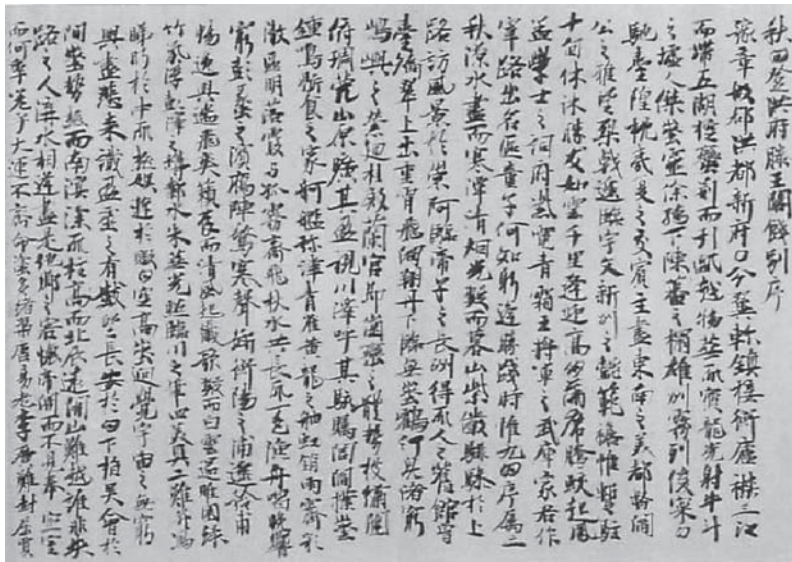


図1 滕王閣序

小論で取り上げようとする「勃三尺微命、一介書生」の対句は、従来解釈が分かっている部分であるが、正倉院本は、この部分を「勃五尺微命、一介書生」としている（図2）。「三」と「五」はどちらも数字であり、かつ書き誤り安い文字であるが、私は正倉院本の「五尺」が、『王勃集』の当初の文字であったのではないかと推測している。もしそうであれば、正倉院本によって、従来の解釈を訂正し、王勃がこの対句に込めた意図を正しく解釈することが可能となるのではないだろうか。



図2

正倉院本の「五尺」に対する私の考えを述べる前に、「三尺微命」に対するこれまでの解釈を整理しておこう。

清末の人蔣清翊は、中国に伝わる王勃の作品すべてに詳細な注を付した。だが、残念ながらこの部分の「三尺」について、注を付していない。しかし『古文真宝』（後集巻3）や『古文観止』（巻7）など幾つかの選集が「滕王閣序」を採録している。それぞれ「歴代名文云、三尺言其小（『歴代名文』に云う、三尺は其の小を言う）」、「方説到自己（方に自己を説（到）うならん）」など、簡略な注が付されているだけで、具体的にどのような解釈しているのかが分かり難い。ただ、後述するように、一般的に「三尺」は王勃の身長と解されていたようである。

この句に新しい解釈を出したのは、民国時期の高歩瀛『唐宋文挙要』（乙編巻1）である。やや長くなるが、その注を引用する。

三尺句蔣氏無注。案『礼記』「玉藻」曰、紳制士長三尺。『周礼』「春官・典命」鄭注曰、王之下士一命。子安曾為魏州參軍、故自比於一命之士、曰三尺微命也。又疑三尺或指法律言、『漢書』「杜周伝」（略）。『旧唐書』「勃伝」曰、官奴曹達抵罪、匿勃所、懼事洩、輒殺之、事覺当誅、会赦除名。三尺微命、自傷曾罹法律、生命甚微也。（「三尺」の句は蔣（清翊）氏 注する無し。案ずるに『礼記』「玉藻」に曰く、紳の制 士は長さ三尺と。『周礼』「春官・典命」鄭注に曰く、王の下士一命と。子安 曾て魏州參軍と為る、故に自らを一命の士に比し、「三尺微命」と曰うならん。又た疑うらくは「三尺」 或いは法律を指して言うならん、『漢書』「杜周伝」に（略）。『旧唐書』「（王）勃伝」に曰く、官奴曹達 罪に抵り、勃の所に匿る、事洩るるを懼れ、輒ち之を殺す、事覺われ当に誅さるべきに、赦に会い名除かる」と。三尺微命は、自ら曾て法律に罹り、生命甚だ微なるを傷むなり）

高歩瀛は身長説に言及していないが、「三尺」に対して、二つの解釈の可能性をその根拠となる典拠とともに提示する。一つは、三尺を紳の長さとするものである。古代にあって紳の長さは身分によって異なり、下級の官僚はその長さが三尺であった。それを典拠として下級官僚を意味

すると解する。第二は法を指すとし、法律に触れ死刑になりかけた身と解釈するのである。この後、幾つかの訳注と関係論文を見てみると、下級官僚説が支持されているように感じられるが、現在まで身長説を含む三説が平行して行われている。例えば、日本には二種の訳がある。一つは『中国古典文学大系 23 漢・魏・六朝・唐・宋散文選』（伊藤正文・一海知義編 平凡社 1970年）で、「この私は、とるに足らぬ三尺の童子であり、まだ一介の書生にしかすぎない」（243頁）と、身長説を採る。一方『新釈漢文体系 16 古文真宝（後集）』（星川清孝 明治書院 1963年）は、「私、王勃は、三尺の小身の微々たる生命の者、一人の書物を読む人間にすぎないのである」と訳し、語釈の部分で、「三尺微命 三尺の微身の意。小さな存在である。謙遜の語。勃が当時十三・四歳であったから三尺というとの説もあるが、妥当ではない。微々たる身ということを誇張して三尺といったものと解する」（142頁）。下級官僚説、法律に触れた身説のどちらに立つかはあまり明らかではないが、身長説は明確に否定している。

中国では、王力『古代漢語（修訂本）』第三冊（中華書局 1985年）は、高歩瀛の注に従うとして「三尺」を「指衣帶結余下垂的部分（紳）的長度（衣帶を結んで垂らした部分の長さを指す）」とし、この句を虢州參軍という下級官僚であった自分と解釈する（1177頁）。また孫望・郁賢皓主編『唐代文選』上（江蘇古籍出版社 1994年）も高歩瀛の二説を紹介のうえ、下級官僚説に立つ。但し、下級官僚は「按此当自謂其曾為沛王府修撰（思うに此は自分が以前沛王府修撰と為ったこと言うのであろう）」と指摘する（284頁）。さらに『唐文選』（李浩選 人民文学出版社 2011年）は、「或言指童子。……按、勃為此文已過冠年、似無自稱為三尺童子之理（童子を指すという説がある……考えるに、王勃がこの文章を作った時には既に二十才を過ぎていたので、自分を三尺童子と称する理由はないように思う）」と、三尺が童子を指すとする説に疑義を呈し、この部分に続いて高歩瀛の注を紹介し「可備参考」と、下級官僚とする説を支持している。このように日中の注釈も、三尺を身長に解するものと、下級官僚に解するものの二説に分かれる⁽²⁾。また官僚と解釈するものも、その具体的な官職については意見を異にしている。これらの解釈の分岐には、星川先生の語釈にも指摘があるように、「滕王閣序」が何時、王勃が何歳の時に作られた作品であることという問題がかかわっているのである。

蔣清翊は、題名下の注で、『唐摭言』（巻5）の「王勃著滕王閣序、時年十四。都督閻公不之信……（王勃滕王閣序を著す、時に年十四。都督閻公之を信ぜず……）」と言う記録を引用する。即ち蔣清翊は、この序は王勃14才の時に作られたと考えていたのである。テキストによっては13才とするものもあるが、この逸話から「滕王閣序」が、王勃の少年時代に作られたとする説がある。

ただこの逸話は、李劍国氏『唐五代伝奇叙録』（南開大学出版社 1993年）によれば、晩唐時代の文学者羅隱の「中元伝」が最初の記録であり、『唐摭言』はむしろ、王勃が馬当山でその神と出会い、神の力で遙か遠い南昌まで一夜で到着したといった、荒唐無稽な部分を削除して記録したとされる⁽³⁾。そうであれば、この記録は事実としてより、13或いは14才の、まだ無名の少年王勃がこのような長大な駢文を書いたということを重要なモチーフとする物語と考えるべき

ではないだろうか。そしてこの物語を下敷きとして、「三尺」を彼の身長とする解釈が生まれてきたと考えられる。なぜなら、この物語を敷衍した『醒世恒言』（巻40）「馬当神風送滕王閣」では、序作成の名誉を奪われた閻公の女婿呉子章が王勃を「是何三尺童稚。将先儒遺文、偽言自己新作（是れ何たる三尺の童稚ぞ。先儒の遺文を将て、偽りて自己の新作と言う）」と罵る場面や、二句をまとめる形で、劇中の王勃に、自身を「三尺書生」と称させている例があるからである（『雜劇三集』（清・鄒式金輯）所収「滕王閣」）⁽⁴⁾。このように逸話から広まった説話世界では、王勃の若さは次第に強調され、それに伴い三尺が身長として定着していったと思われる。

このような三尺を身長と解する説に対し、高歩瀛氏が三尺を紳の長さ、あるいは法律書を指すとされた新たな主張を受けて、仮に13・4才の少年であっても三尺は小さすぎるという批判が提出される。早く屈万里先生は「「滕王閣序」的兩箇問題」（『大陸雜誌』第16巻第9期 1958年）で、明確に三尺身長説を否定した。氏は「滕王閣序」制作時、王勃が13・4才であったとする説を退け、「三尺微命」について、次のように言う。「「三尺微命」的三尺二字、一般人都認為是指童子身材的高度説、實際上也不是。因為如果指童子身材的高度説、則孟子裏有「五尺之童」的現成典故、子安似乎不至於棄而不用。退一步講、如果不用典故而照當時的尺度説、則十三四歲の子安、身高也決不止三尺（摠近人考証、唐尺一尺、約合今三分之一公尺）（「三尺微命」の三尺二字について、一般の人はみな子供の身長を言うと考えているが、実際には違う。なぜならもし子供の身長を指すと言うなら、『孟子』に「五尺之童」という既に定まった典故があるのに、子安（王勃）は棄てて用いなかったようであるからだ。一步譲って、もし典故を用いていないとしても当時の尺度に照らして言うと、13・4才の子安は、身長は絶対に三尺に止まらない（近人の考証に依れば、唐代の一尺は、ほぼ三分の一メートルに相当する）」と述べ、続いて高歩瀛の注解を引用し、その説に賛成している。

屈万里先生が滕王閣序制作年を王勃26才時とする点については、検討を必要とする。しかし、三尺を身長と解する説に対する反対は、伝承を無批判に受容してきた従来の解釈に対する画期的な批判であった。この後、幾つかの論文が身長を指すとする説を批判する⁽⁵⁾。

三尺を身長とする説は、高歩瀛氏と屈万里氏により、かなりの打撃を受けたと言えよう。では、正倉院本のように「五尺微命」であった場合、どのように考えればよいのだろうか。特に屈氏論文は、三尺が小さすぎるということを身長説否定の理由の一つとされている。では、五尺であったならば、この句はやはり王勃の身長を示していたと考えてよいのだろうか⁽⁶⁾。そしてそこからさらにこの句を、現在学界において否定されつつある「滕王閣序」が、王勃13・4才時に作られたとする説⁽⁷⁾の有力な根拠として提示できるのだろうか。

二

王勃は自らの身長を指して「五尺」と称しているのだろうか。中国国家計量総局主編『中国古代理度量衡図集』（文物出版社 1981年）によれば、唐代の一尺は約30.0cmである。五尺は150cm

前後、三尺だと90cm程度になる。屈万里先生が指摘されたように、13・4才の身長として「三尺」は小さすぎる。五尺ならば、13・4才の少年の身長と言えるかもしれない。しかし、私は、この句では、王勃は典拠として「五尺」を用いているのであって、王勃の実際の身長と見なす必然性はないのではないかと考える。

先に引用したように、屈万里先生は「五尺」に典拠があることを指摘されている。先生が指摘されるのは『孟子』（滕文公上）の「従許子之道、則市買不貳、國中無偽、雖使五尺之童適市、莫之或欺（許子の道に従えば、則ち市買 貳ならず、國中 偽り無し、五尺の童をして市に適かしむと雖も、これを或欺する莫し）」であろう。これは許子、即ち許行の説を信奉する陳相が孟子との論争の際の発した言葉である。価格を画一化すれば、＜五尺の子供＞を買い物に行かせても、商人が子供だからと欺いて高く売ったりはしないと主張する。確かに、この部分の五尺は間違いなく子供の身長である⁽⁸⁾。だが、私は「勃五尺微命」の「五尺」は、『孟子』ではなく、『荀子』「仲尼之門人、五尺之豎子、言羞称乎五伯、是何也（仲尼の門人、五尺の豎子も、言に五伯を称するを羞ず、是れ何ぞや）」（仲尼篇）、孔子の門に学ぶ者は、＜五尺の少年＞でさえ、五覇のことを口にすることを恥じた」を、典拠とするべきではないかと考える。

『荀子』をふまえた典拠としては、例えば「夫仁人者、正其誼、不謀其利。明其道、不計其功。是以仲尼之門、五尺之童、羞称五伯。為其先詐力、而後仁誼也。苟為詐而已、故不足称於大君子之門也（夫れ仁人は、其の誼を正しうして、其の利を謀らず。其の道を明らかにして、其の功を計らず。是を以て仲尼の門、五尺の童も、五伯を称するを羞ず。其の詐力を先にして、仁誼を後にせしが為なり。苟しくも詐を為すのみにして、故に大君子の門に称するに足らざるなり）」（『漢書』董仲舒伝第二六）。さらに「五尺童子、羞比晏嬰与夷吾（五尺の童子、晏嬰と夷吾とに比するを羞ず）」（『文選』卷45 楊雄「解嘲」）をはじめとして多数の例を挙げることができる。『孟子』の例に近い単純に少年の身長を示すために「五尺」が用いられている例ももちろんあるが、私の調査では、上のように＜ほんの少年でさえ＞という『荀子』のニュアンスで用いられている例が圧倒的に多い。その状況は初唐においても変わらない。例えば崔融「為朝集使于思言等請封中岳表」（『文苑英華』卷600）「五尺童兒、羞論霸道。八十父老、不知帝力（五尺の童兒も、霸道を論ずるを羞じ、八十の父老は、帝力を知らず）」、「五尺童子尚以為愚（五尺の童子も尚おいて愚と為す）」（『龍筋鳳髓判』卷3）のほか、「曾試論之、世之從仕者、若使之為將也、而才無韜略、使之為吏也、而術靡循良、使之屬文也、而匪閑於辭賦、使之講學也、而不習於經典、斯則負乘致寇、悔吝旋及。雖五尺童兒、猶知調笑者矣（曾て試みに之を論ずれば、世の從仕する者、若し之をして將と為さしめて、しかも才に韜略無く、之をして吏と為さしめて、しかも術に循良靡く、之をして文を屬らしめて、しかも辭賦に閑ならず、之をして學を講ぜしむるに、經典に習れずんば、斯れ則ち負乘して寇を致し、悔吝旋ち及ぶ。五尺の童兒と雖も、猶お調笑することを知る者なり）」（『史通』内編・辨職篇）などの例がある。更に何よりも、「豈知夫四海君子、攘袂而恥之乎。五尺微童、所以固窮而不為也（豈に夫れ四海の君子、袂を攘いて之を恥ずるを知らんや。五尺の微童も、固より窮するも為さざる所以なり）」（上絳州上官司馬書（卷5））と、王勃自身に『荀

子』を意識した表現があるのである⁽⁹⁾。ちなみに蔣清翊は、この部分に対して先に挙げた『漢書』董仲舒伝を引いている。

「五尺」は確かに少年の身長である。そしてそこから少年を象徴する言葉となった。しかし『荀子』及び、『荀子』を典拠とする用例から浮かび揚がるのは、幼児期を脱し、大人の世界に入る準備段階にあって、勉強を始めたばかりの学力不十分の若者のイメージである。「五尺」は、そもそも13・4才の少年に限定される言葉でもないのであり、王勃の実際の身長を指していると考えする必要はない。

これまで、「滕王閣序」中の「童子何知」や「終軍之弱冠（正倉院本は、「弱冠」を「妙日」に作る）」の句は、王勃がこの序を13・4才の時に作ったことを示すものであるという指摘があった。それに対し、滕王閣におけるこの宴の参加者中、王勃が若年であったため、そのように称したと解すべきであるという反論が既になされている⁽¹⁰⁾。この句もまた、具体的な年齢を暗示するものではなく、『荀子』を典拠とし、勉強をはじめたばかりの学力不十分な若者と、自分のことを謙遜した表現と解すべきなのではないだろうか。

三

ここで、「五尺微命、一介書生」という対句の中で、「五尺」の意味を上記のように解することが可能かどうか、確認しておきたい。

「微命」は蔣清翊が『楚辞』天問、「螽蟴微命力何固（螽蟴 微命なるも力 何ぞ固き）」と典拠を指摘している。微弱な命と言ったような意味に解されている。もちろん王勃はこの語を意識している。「上絳州上官司馬書」の「五尺微童」は、自分のことを言っているのではないが、この「微童」も含め、社会において足場を持たない、数に入らないような、か弱い立場を指すように考えられる。「五尺」と組み合わせれば、やはり、そのような物の数にもはまらないような若者と解せる⁽¹¹⁾。

「一介書生」はどうであろう。王勃の現存する作品中（含佚文）、書生という言葉は、「滕王閣序」を含め6例ある。「下官寒郷劍士、燕国書生」（春日序（佚文））のような典拠として用いている例を除き、自称として「書生」を用いている例は3例あるが、1例は、手紙の末尾に「書生王勃死罪死罪」（上劉右相書（巻5））とするものである。他は、「今勃東鄙之一書生耳」（上郎都督啓（巻4））と「借如勃者眇小之一書生耳。曾無鐘鳴鼎食之榮、非有南隘北閣之援（借りに勃の如き者は眇小の一書生のみ。曾て鐘鳴鼎食の榮無く、南隘北閣の援有るに非らず）」（上劉右相書）の2例である。

この2例は、世に出る機会を得ず、勉学を続ける若者である自分を卑下する表現となっている。また「眇小」の語は、他にも「下官天性任真、直言淳朴。拙容陋質、眇少之丈夫。蹇歩窮途、坎壈之君子（下官は天性任真、直言淳朴なり。拙容陋質、眇少の丈夫、蹇歩窮途、坎壈の君子なり）」（山亭興序（巻9））がある。この表現は孟嘗君の体格の描写を典拠とするが、前後の句から考え

ると、「五尺」と同じく、王勃の実際の体格を表現しているのではなく、優れた才能を抱きながらも、社会的に評価されない卑小な存在と読むべきではないか。そう考えると「眇小之一書生耳」という表現は「五尺微命、一介書生」を一句に縮めた句と考えることも可能であろう。「書生」は言うまでも無く、勉学に励む学生を指すが、これら2例からみても、「一介書生」は、平凡で取るに足りない学生と解釈でき、まさに「五尺微命」と矛盾無く、勉学中の、社会的に頼る者もない不安定な状況にある平凡な若者と、自分を卑下して述べていると考えてよからう。

典拠から考えても、対になっている「一介書生」との関係からも、この部分は本来「五尺微命、一介書生」と作っていたと考えられる。そして「五尺」は確かに本来は童子の身長を指したが、王勃は自分の身長を示す言葉としてではなく、『荀子』を典拠として、＜勉強を始めたばかりで学識不足で、頼るところもない若造＞という自分を表現するために用いたと解すべきなのである。

四

最後に、なぜ「五尺」が流伝中に「三尺」に書き換えられ、定着したのかということについて、推量を述べておきたい。私はそこには3つの原因が考えられるように思う。

一つには言うまでもなく、伝写の間の書き間違いである。「三」と「五」は書き誤り安い。その例として、王勃とともに初唐四傑に数えられる楊炯の「少室山少姨廟碑」を挙げることができる。「周人之養国老、始闢西膠。漢氏之召諸生、初開太学。辟雍所以行其礼、泮宮所以辨其教。童子三尺、羞談覇后之臣。冠者六人、惟述明王之道。其文德有如此者（周人の国老を養い、始めて西膠を闢く。漢氏の諸生を召き、初めて太学を開く。辟雍は其の礼を行う所以、泮宮は其の教を辨ずる所以なり。童子三尺も、覇后の臣を談ずるを羞ず。冠者六人、惟だ明王の道を述ぶ。其の文徳 此の如き者有り）」とある。この「三」の部分、『文苑英華』（巻878）を見ると、「一本作五」と注されている。一見して明らかのように、この句もまた『荀子』を踏まえており、「五尺」でなければならない。もちろん誤記は一般的に起こる現象であるが、ただ、「滕王閣序」に限っては、既に指摘したように物語の影響があると考えられる。これが二番目の原因である。そして最後に度量衡の変化が考えられる。盛唐の頃から、童子の身長を指す言葉が、「五尺」から「三尺」に換わるように思われる。例えば韓愈「論淮西事宜状」（『韓昌黎文集』巻40）は「譬如有人雖有十夫之力、自朝及夕、常自大呼跳躍、初雖可畏其勢、不久必自委頓。乘其力衰、三尺童子、可使制其死命（譬えば如し人有りて十夫の力有りて雖も、朝自り夕に及び、常に自ら大呼跳躍せば、初めは其の勢畏る可しと雖も、久しからずして必ず自ら委頓せん。其の力の衰うるに乗ずれば、三尺の童子も、其の死命を制す可し）」と、「三尺」に作っている。私の調査の限り、この部分には文字の異同、即ち「五尺」に作るテキストはないようである。先に指摘したように、唐代の三尺は90cm前後、『孟子』の五尺よりも小さい。童子が何歳くらいを指すかはしばらくおき、戦国時代110cm程度であった「五尺之童」も、唐代に150cmとなると、少なくとも文学的イメージと

しては大きすぎると感じられたのではないだろうか。いずれにせよ、「三尺」を童子の身長とする表現は王勃以前には容易には見出しがたいが、盛唐以降「五尺」と「三尺」が平行して行われるようになる⁽¹²⁾。このような意識が、「五」を「三」として定着させた理由として考えることができる。

「滕王閣序」の「三尺微命」の「三尺」は、当初王勃の実際の身長と解されてきた。身長としては小さ過ぎるという理知的な観点が出発点になっていると考えられる高氏の解釈は、その意味で説得力をもち、支持された。しかし正倉院本の「勃五尺微命」は、この句の解釈の見直しを要求するものであった。正倉院本に従えば、この句は、続く「一介書生」の句とともに、勉強を始めたばかりの若者で、頼るべき者もない平凡な若者という謙遜の表現であったのである。「三」は小さな誤写であるかもしれないが、後世に大きな誤解を与えた誤写であったと言えよう。

終わりに

作品は作者の手を離れた瞬間から、その解釈は読者に委ねられる。中国文学に限らないが、古典作品においては、そのようないわば<読まれてきた歴史>もまた、尊重されなければならない。ただ「滕王閣序」に限って言えば、この作品の<読まれてきた歴史>には、羅隱「中元伝」によって紹介された王勃滕王閣物語の竄入が見られる。その典型が神童王勃のイメージである。戦国時代と唐代の「尺」が示す長さのずれから、盛唐の頃から「五尺」「三尺」の両テキストが並行するようになり、最終的に少年のイメージを強める「三尺」が「五尺」のテキストを駆逐していったのではないだろうか。「三尺」を身長とする伝統的解釈を否定した高歩瀛氏の観点には、作品そのものと向き合おうという理知的な姿勢を見ることができる。高氏の新しい解釈が支持されてきた理由は、そこにある種の近代的批評精神が込められていたからであろう。

近年、先人の研究成果を総括し、広く東アジア世界の文化的基盤として中国古典文学を見直すとする研究が盛んになりつつあるように感じられる。<読まれてきた歴史>もそのような文脈のなかで、あらためて検証されなければならないであろう。更により広範な東アジアというエリアで資料調査が可能となりつつある今日、諸テキストを調査し、作者の意図を正確に読み解こうとする研究も、新しい展望を切り開くことが期待されている。正倉院所蔵の文献をはじめとする日本の抄本は、従来指摘されてきたように作品の精密な読解のための重要なテキストであるばかりでなく、作品の<読まれてきた歴史>を浮かび揚げさせる資料にもなるように思われる。小論はその一例を示そうと試みたものである。

注

- (1) 拙著『正倉院蔵<王勃詩序>校勘』（香港大学饒宗頤學術館 2011年）及び「略論作為文本的正倉院蔵<王勃詩序>」（〈文学与文化〉（南開大学 2011年第一期））を参照。

- (2) このほかに、手近にある幾つかの訳注を見てみた。『古文観止』には三種類の訳注がある。天津古籍出版社(64年)は身長、安徽教育出版社・湖北人民出版社(ともに84年)は、紳の長さとするが、前者は官位の低さを、後者は身分が賤しいことを指すと解している。『歴代駢文名篇注』(譚家健著 黄山書社 1988年)と『中国古典文学読本叢書 唐文選』(高文・何法周主編 人民文学出版社 1987年)も、『礼記』(玉藻)と『周礼』(春官・典命)の鄭玄注を引き、下級官僚の意に解する。
- (3) 「中元伝」は現在、宋・委心子撰『新編分門古今類事』巻3「王勃不貴」(金心点校 中華書局 1987年)と『歳時広記』巻35「賦滕閣」の題で採録されている。
- (4) 『歳時広記』には既に、王勃に向かって「三尺小兒童」と言う場面がある。このほかに周亮「“三尺微命”与<滕王閣序>的写作時間」(『貴州大学学报(社会科学版)』1997年第3期)また同氏「由<金瓶梅詞話>中一段笑樂院本所引起的思考」(『信陽師範学院学报(哲学社会科学版)』2000年第1期)によると、『金瓶梅詞話』に「三尺」を少年王勃の身長として描写している部分があるという指摘がある。
- (5) 例えば張志烈「王勃雜考」(『四川大学学报哲学社会科学版』1983年第2期)。黄任軻「<滕王閣序>疑義辨析」(上海社会科学院文学研究所編『文学研究叢刊』1884年)。任国緒「王勃<滕王閣序>作于何年」(『北方論叢』1986年第6期)。張麗「滕閣一序多疑云 王勃“作年”訟至今一試從“童子”、“終童”与“三尺”等看王勃作<滕王閣序>的確切年齡」(『滄桑』2006年)らは皆、「三尺」を王勃の経歴に関連させて解釈している。
- (6) 注④周亮氏1997年論文は、五尺であれば王勃の身長である可能性があるとする。
- (7) この説は、完全には否定されていない。例えば駱祥發氏は『初唐四傑研究』(東方出版社 1993年)において、13才説を主張しておられる。
- (8) ちなみに、前掲書によれば、戦国時代から漢代まで、一尺は概ね23cm前後である。そうであったとすると『孟子』中の「五尺」は115cmほどであり、確かに少年の身長と言えそうである。
- (9) 余談であるが、京都大学文学部閲覧室には、「王勃年譜」など王勃研究や『賦史大要』など中国文学研究に大きな足跡を残された鈴木虎雄博士の手沢本が幾つか保存されている。『評選四六法海』もその一つであり、書き込みから想像するに名著『駢文史序説』の資料の一つであったようである。この書の「滕王閣序」の部分に「上絳州上官司馬書」の句を引用し「三尺微命、前賢無解、私疑三字五詛」という先生の付箋が張ってあった(図3)。鈴木先生は正倉院本を見ていらっしゃるらないようであるが、私の知る限り、「三尺」を伝写の間の誤りと断定するのは、この付箋だけである。
- (10) 注⑤黄任軻氏論文を参照。ただこれらの言葉や句が、王勃が13・4才の時に「滕王閣序」を作ったことを示す根拠にはならないということは、既に高歩瀛氏が指摘している。
- (11) 王勃には他に「昇降之儀有異、去留之路不同。嗟控地之微軀、仰冲天之逸翮」(秋日送沈大虞三入洛詩序(佚文))と、洛陽に向かう友人に引き比べ、蜀地をさまよう自分を「微軀」と表現している例がある。
- (12) 李白「醉後贈從甥高鎮」詩(『李太白文集』巻八)「時清不及英豪人、三尺童兒重廉藺」がその早い例と思われる。

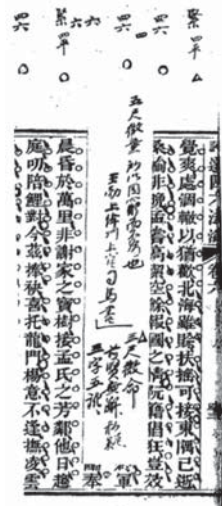


図3 鈴木先生付箋
(京都大学文学部蔵)